

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

6. 四条派の風景画

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

江戸後期に登場した円山応挙は、日本画に西洋画の陰影法や遠近法を取り入れて、写実的な画風を編み出しました。つづく呉春は、文人画の思想や日本的な情感を取り入れて、詩情にあふれた画風を展開しました。呉春の開いた四条派は幕末明治に一大潮流となり、大坂でも優れた絵師が輩出しました。その中には大坂の風景を地元の絵師ならではの観察眼と愛情をこめて描き、好評を博した絵師もいました。今回紹介するのはそうした絵師たちです。

玉手棠洲画・大蔵謙斎賛「天保山図」〈絹本墨画淡彩 47.0×71.0cm〉

玉手棠洲(1795～1871)は名を蓮、字を清操といい、中井藍江に絵を学びました。山水人物を得意とし、安政3年(1856)刊『浪華名流記』には「縦横超絶」と賞されています。酒を好み、毎日泥のようであったので、人々は酔仙人と称しました。2人の子も画家として活躍しています。

本図は天保山を海の方から描いたものです。経済都市大坂の大動脈である大川は、

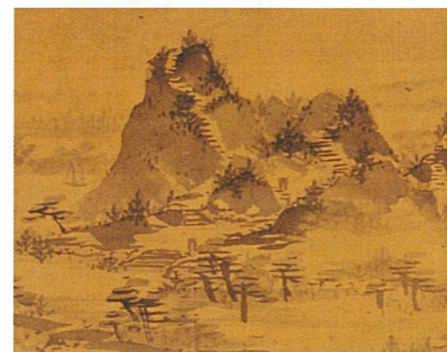
江戸後期になると上流からの土砂が堆積し、航行に支障をきたすようになりました。船の安全を確保するために、天保2年(1831)、奉行所のお達しで大川の川浚えが行われました。動員された町人たちは町ごとに揃いの衣装を作り、お祭り騒ぎでのぞんだそうです。浚えた土砂を河口に積み上げたところ、高さ40mもの山ができあがりました。これが天保山で、斜面には桜や松が植えられ、茶屋がで

き、他国の人々までもが訪れる浪華の一大名所となりました。できたての土砂の山はごつごつしており、まるで唐絵(中国の絵)に出てくる蓬萊山(からい)のようです。そこで大坂の人たちは、都会人らしい洒落で散策用の橋におめでたい名をつけました。本図は天保山ができた7年後の天保9年の作です。賑やかな見物客で賑わった山も今は10月、皓々たる月の光を浴びて静かなたたずまいを見せています。苦舟にはうっすらと霜がおりています。

賛をした大蔵謙斎(1786～1844)は、博識で詩文をよくした儒学者です。賛の内容は民の声に耳を傾けた善政をたたえ、「川浚え船の帆柱が林立し、帆が風になびいている。波都(浪華)の男女の美しい着物は霞のようだ」というものです。遊興都市大坂らしいエピソードとして、天保山は語り継がれたのでしょ

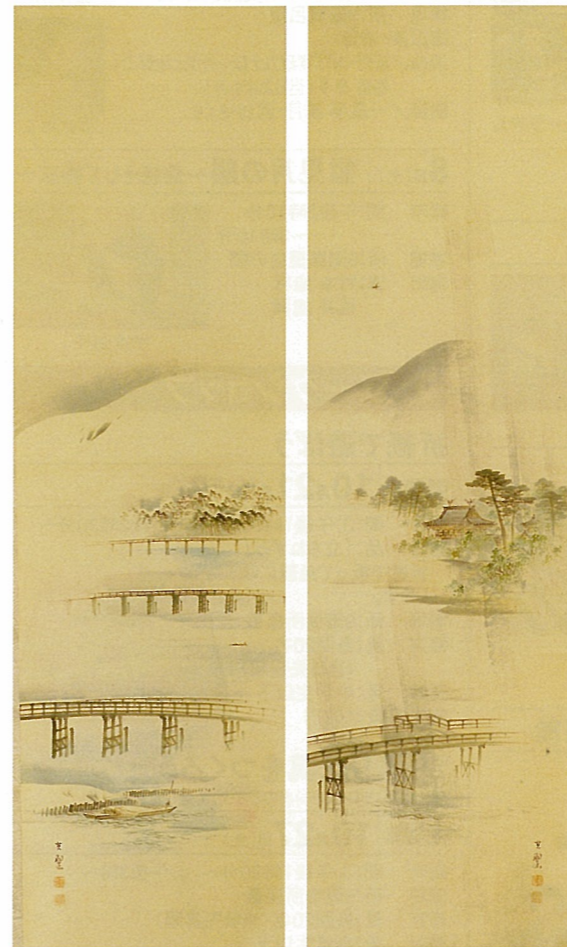


天保山図



天保山図 部分

菅其翠「宇治橋・大坂三大橋図」〈双幅 紙本着色 各104.2×29.5cm〉



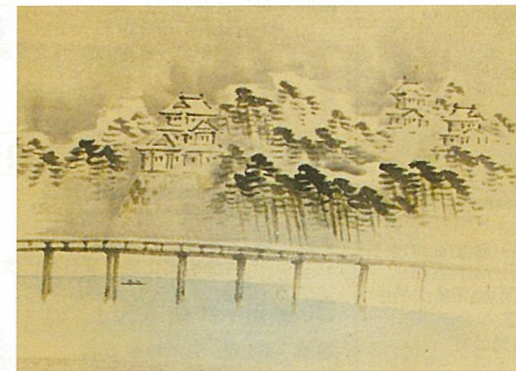
宇治橋・大坂三大橋図

菅其翠(1831～87)は絵師の菅松峰の子で、名を元長、字を子善といいました。父とともに挿花にもすぐれ、古流3代目を継いだと伝えられます。四条派の西山芳園に学び、写実的な風景画や情感あふれる花鳥画を描きました。

本図は右幅に宇治の大橋、左幅に大坂の三大橋を描いたもので、五月雨の宇治と雪晴れの大坂が対照の妙を見せています。宇治の大橋は勢多、山崎(のちに淀)とともに古代の三橋と称さ

れた橋です。三の間と呼ばれる張り出しには、かつて橋姫(橋の守り神)が祀られ、ここから汲む水は名水とされました。豊臣秀吉も茶会を催したおりに水を汲ませたという話が伝わっています。

一方、左幅に描かれたのは手前から難波橋、天満橋、天神橋、大坂の三大橋といわれた橋です。大坂には八百八橋があるといわれましたが、実際には200ほどであったといわれています。その中でもとくに交通の要所となった橋12は公儀橋とされ、幕府の費用で補修や架け替えが行われました。この三大橋も公儀橋で、その大きさは最長の天神橋で全長137間4尺(約250m)ありました。本図では都



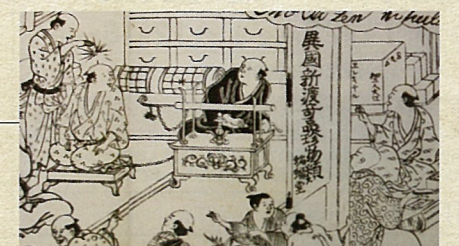
宇治橋・大坂三大橋図 部分

会の雑然とした家々を雪の中にかき消して、三橋の背後に大坂城を配しています。似たような構図の絵を其翠はしばしば描いており、大坂の誇らしい風景として好んで描いたものと思われる。

(岩間 香 摂南大学教授)

見どころ うら話 こんじかん

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。



「撰津名所図会」に描かれたエレキテル

「国産のエレキテル？」

町家の大通りのほぼ中ほどに、疋田屋蝙蝠堂というお店がひと際目だって軒を並べています。唐高麗物屋という設定。今でいう高級輸入雑貨を商う店頭です。浪花ではたいへん有名な店であったことは、『撰津名所図会』に絵入りで紹介されていることからわかります。この店頭を復元する過程で、たいへん興味深いことがわかりました。それが店頭に並ぶエレキテルです。

平賀源内の発明品としてよく知られたものですが、その原理はオランダからもたらされました。長崎遊学の際に和蘭通詞から壊れたエレキテルを入手し修復に成功したのが、安永8年(1776)といわれます。以後何台か製作し、実験を重ねていたことがさまざまな資料によって判明します。当時は医療機器というより、見

せ物としての意味合いが強かったようです。さて、このエレキテル。疋田屋蝙蝠堂の店頭にも並んでいます。その使用方法は?と見てみると、客寄せとして利用されています。台に正座し楽しむ客と迷惑そうにハンドルを回す若旦那といったところでしょうか。通りすがりの人も興味津々。この絵が描かれたのは寛政年間。源内がエレキテルを完成させてから20数年後となります。

問題はここから。このエレキテルが納めている箱に秘密があります。箱書きを観察すると「エレキテル 細工人大江」とあります。さてこの大江という名前。実は浪花で活躍していたカラクリ細工を手がける人々であることがわかっています。カラクリ仕掛けの人形など手の込んだ商品などは彼らが世に出していたので

す。天神祭に登場する「お迎え人形」などもその多くは彼らの仕事となっています。浪花では国産のエレキテルが製作・販売されていたのです。

では、当時のものが完全に復元できるのでしょうか。実はできないのです。ガラス瓶に金属の鎖を擦り付ける構造になっているのですが、このガラス瓶は鉛成分が混入していないと静電気が発生しないのです。現在こうしたガラスは製造されていません。ガラスの製造技術が発達してしまい、ガラスには鉛が入っていないのです。いくら擦っても静電気は発生しないのです。一度当館が復元したエレキテルを体験してみてください。一工夫を凝らした結果、見事に髪の毛が逆立ちます!

(学芸員 明珍健二)